

## —調査報告—

# 長尾山の古墳群(II)

## ——雲雀丘古墳群——

関西学院大学考古学研究会

### I 雲雀丘古墳群の概要

#### (1) はじめに

関西学院大学考古学研究会は、研究活動の対象地域をこれまで西摂地方に求め、特にこの地域に現存する後期古墳の解明に傾注してきた。そして、現在西摂平野北方に展開する長尾山の古墳群の調査・研究を押し進めている。まず、昨年度の「長尾山の古墳群Ⅰ—中筋山手古墳群—」(『関西学院考古』第4号昭和53年)においては、長尾山の古墳群解明の第一歩として丘陵の最西端に位置する中筋山手古墳群についての調査報告を行なった。そして今回も、この趣旨に基づいた研究活動の一環として雲雀丘古墳群に注目し、その研究報告を行なうこととした。

長尾山の古墳群に関する当研究会の研究・調査は、長尾山の古墳群全体が考察対象である。つまり、それは当古墳群の正確な分布状況の把握、群構成の検討、名称の統一、個々の古墳群ごとの形成過程および性格解明であり、そして究極的には長尾山の古墳群という全体像の統一的な把握、解明が目的である。

近年、長尾山丘陵は宅地開発が急速に進行し、古墳の現存確認においてさえも困難である。当丘陵東端に位置する雲雀丘古墳群においてもこの傾向は特に顕著であり、後述するようにすでに2つの支群が消滅し現存が確認されている古墳は2つの支群のみである。しかも、当古墳群における本格的な発掘調査としてこれまでに記録されているのはC南群だけであり、この点、長尾山の古墳群の中でもその研究が遅滞している古墳群の一つと言える。

以上の実情から、当研究会は一貫した長尾山の古墳群研究の一過程として雲雀丘古墳群を取り上げ、その現状を把握し、若干の考察を述べることとする。

#### (2) 研究史

長尾山の古墳群に関する調査・研究は、今まで数多く実施・報告されており、個別的ではあるが徐々にその全体像が解明されつつある。ここでは、特に雲雀丘古墳群を対象とする調査・研究を述べ、以下列記することとする。

- ① 昭和29年、武藤誠・村川行弘氏らによるC南群の発掘調査。

これは、雲雀丘一丁目附近の宅地造成に伴う緊急発掘調査であり、当時確認された8基の古墳のうち

ち 3 基について発掘調査がなされた。『宝塚市史』第 4 卷に収録。

- ② 石野博信氏 「宝塚市長尾山古墳群」(『宝塚市文化財調査報告第 1 集』昭和 46 年)。

昭和 34 年、石野博信氏は長尾山丘陵全域にわたる分布調査を実施するとともにこの後期古墳の群構成ならびに呼称法について新たな考察を加えた。

氏の分布調査の結果、雲雀丘支群においては、A 小支群 5 基(雲雀丘ゴルフ場附近) B 小支群 4 基(精常園附近) C 小支群 5 基(雲雀丘)の計 14 基の古墳が確認されている。

- ③ 兵庫県教育委員会編 『兵庫県遺跡地名表』 昭和 40 年

是川長氏らによる分布調査であり、当周辺地域においては切畠群集墳として 18 基の古墳が確認された。

- ④ 武藤誠・橋本久他 「雲雀丘古墳群」(『宝塚市史』第 4 卷 昭和 52 年)

- ⑤ 関西学院大学考古学研究会 雲雀丘古墳群 C 北支群 1 号墳実測調査(「長尾山の古墳群 I 」附載『関西学院考古』4 号 昭和 52 年)

- ⑥ 宝塚市教育委員会 雲雀丘古墳群 B 群 1 号墳発掘調査 昭和 53 年

なお、長尾山の古墳群に関する名称は報告がなされるたびに別個の名称が使用されてきた。雲雀丘古墳群においても現在のところ、石野氏の報告、『兵庫県遺跡地名表』、あるいは近年編集された『宝塚市史』と三者三様の呼び方をしている。以下はこれらの呼称法の比較一覧表である。『兵庫県遺跡地名表』を別にすると、石野氏の報告と『宝塚市史』はほぼ一致している。ただ、石野氏の B 小支群を、さらに南北に二分しているが、本書では、今後の混乱を避けるため一応『宝塚市史』の呼称法に準拠する。

第 1 表 『市史』の呼称法を基準とする当古墳群の名称比較

	宝塚市史	石野博信	兵庫県遺跡地名表
群構成	長尾山の古墳群	長尾山古墳群	
	雲雀丘古墳群	雲雀丘古墳群	
	・ A 群	・ A 小支群	
	・ B 群	・ C 小支群	
	・ C 南群	・ B 小支群	切畠群集墳

(3) 位 置(第 1 図、第 2 図)

長尾山の古墳群は西摂平野の北方に展開する広範な長尾山丘陵に存在する。この東西約 8Km にわたる丘

陵全域に展開する古墳群を総括して長尾山の古墳群と呼び、東から雲雀丘古墳群・雲雀山東尾根古墳群・雲雀山西尾根古墳群・平井古墳群・山本古墳群・山本奥古墳群・中筋山手古墳群・中山寺白鳥塚古墳の1独立墳と7古墳群によって構成されている。現在、約150基の後期・終末期の古墳が確認されている。

雲雀丘古墳群は長尾山の古墳群中、最東端に位置するものである。分布範囲は万籾山から東にのびる大尾根の南斜面あるいはそこから派生する尾根上、標高約90m~200mにわたる東西に幅広い地域である。

当古墳群は4つの群に分けられている。

#### 〈A 群〉

万籾山古墳の東側尾根、標高190m~200mに分布している群であり、石野氏の記録によれば5基確認されている。現在のゴルフ場附近にあたり、その建設に伴う開発工事の為、古墳は全て破壊された。

#### 〈B 群〉

雲雀丘一丁目・二丁目にあたる標高120m附近の南斜面に分布している群である。石野氏の報告から、当時少なくとも4基の横穴式石室を有する古墳が存在していたことが判明している。現在、宅地造成、住宅建設によってこの附近は全く旧状をとどめておらず、現存する古墳は昭和53年7月発掘調査が行なわれたB-1号墳だけである。なお、この古墳が石野氏の4基に含まれるかは不明である。

#### 〈C 南群〉

C南群は、雲雀丘一丁目の東部地区、現在の住宅地域内で確認されていた群であり、標高100m附近に立地していた。

当群は、昭和29年緊急発掘調査が行なわれた（研究史①、第4表参照）。しかし、その後の宅地造成によってこれらの古墳は全て破壊されている。

#### 〈C 北群〉

C北群は、旧地形を比較的とどめている、尾根の南緩斜面、標高120m~150m附近に現存する群である。行政区画では雲雀丘山手二丁目にあたる。

当研究会はこれまでの分布調査の報告を踏まえた上で、C北群の全域にわたって分布調査を実施した。踏査の結果、現存が確認できた古墳は4基であり、これを『宝塚市史』の報告と比較すれば、2号墳は住

第2表 確認結果比較表

	確認済みの 現存墳	新たに確認さ れた現存墳	消滅墳	未確認墳
宝塚市史	3基 1号墳 3号墳 4号墳	1基 (6号墳)	1基 (2号墳)	1基 (5号墳)
兵庫県 遺跡地名表	3基 1号墳 2号墳 3号墳	1基		15基



第2図 雲雀丘古墳群の分布図

宅造成のため地下に埋没、3・4号墳は現存確認、5号墳は未確認、この他に新たに一基を確認したことになる。5号墳は古墳でない可能性があるが、一応重複を避けるため、新たに確認した古墳を6号墳とする。なお、『兵庫県遺跡地名表』においては、既述したようにA群と一括して切畠群集墳とし18基の古墳の存在が報告されている。

今回の確認結果を『宝塚市史』および『兵庫県遺跡地名表』の記載と比較すれば第2表のとおりである。

#### (4) 調査の経過

当研究会は分布調査を終了した後、現存する古墳の実測調査を実施した。調査対象古墳は3号墳・4号墳・6号墳の3基であるが、6号墳に関しては墳丘実測のみにとどめた。調査の経過は以下のとおりである。（衣川）

3号墳実測調査 昭和53年5月18日・14日・21日・27日

4号墳実測調査 6月10日・17日・18日・21日・22日

6号墳実測調査 10月7日・8日・14日・15日・11月2日

## II 雲雀丘C北群の調査結果

#### (1) 位置と現状

今回の調査対象地域は、雲雀丘古墳群の中で最も東部にあたるC支群である。現在C北群には4基の古墳が遺存しており、今回はC北群1号墳を除く3号墳・4号墳・6号墳について調査を行った。

3号墳・4号墳・6号墳は、雲雀丘山手二丁目に所在する。3基の古墳の立地する尾根は、当地域の西部を南北に延びる主尾根から分岐して東西に走る小尾根で、南に傾斜して低くなりC南群の緩斜面へと向う。この尾根は、その東尾根筋を宅地造成のために大きく削られているが、古墳のある南傾斜面は、比較的その旧状をとどめている。3基の古墳はこの南傾斜面の標高135m～155mにかけて隣接して築造されている。3基の古墳の南部は削られて谷となっている。この谷の上を、3号墳から4号墳の墳丘裾部を通り、6号墳へと道が造られており、また自然地形を利用した山道が、4号墳の裾を取り巻くように走っている。

3号墳は3基の古墳の中では最も東部、標高137mに現存する。現在その南東部を宅地造成のために大きく削平され平坦面となっている。そのため墳丘はほとんど残されてはいない。石室内は以前、祭壇として祭られていた形跡がある。床面・奥壁・両側壁ともにすべてコンクリート舗装が施され、天井石は一部露出しており、一部が抜きとられている。また羨道部では両側壁に沿うように石垣が造られ、東部の平坦面向って階段が設けられている。

4号墳は3号墳の西約20m、標高141mにあり3基の古墳のほぼ中央に位置する。墳丘はその旧状

をよく保っており、南東部においては、山の傾斜面を削り墳丘とした様子がはっきりと認められる。石室内は現在落石が多く特に左側壁のいたみがひどく、非常に危険である。また天井石と羨道部の一部が露出している。

6号墳は3基の中で最も西部にあり、4号墳の西約25m、標高も150mと3基の中で最も高い所に位置する。墳丘は南東部において削平されて平坦面となり、古い人家が残っている。従って6号墳は墳丘の規模・旧状が大変把握しにくい。また石室が頂上部と羨道部で露出し、石室内には土砂が流入している。

(岡島・高田)

## (2) 雲雀丘古墳群C北群3号墳(図版1・2・4・5)

### 〈墳丘〉

東側は全くの損壊状態である。また西側の地形も相当変化しており旧状を保っているとは言い難い。わずかながらも旧状を保っているのは玄室部あたりと、その北方部の小径のあたりまでである。墳丘規模は、径約15m～16m、高さ約3.5mの円墳である。

### 〈石室〉

石室は主軸をほぼ正南北にとり、南に開口する両袖式の横穴式石室である。

石室規模は、石室現存長約9m、玄室長約3.8m、羨道現存長約5.2m、玄室幅は、奥壁部約1.4m、中央部約1.7m、袖部幅約1.7mあり、入口に向って緩く開いている。羨道幅は、玄門部約1.2m、中央部約1.1m、羨門部約1.0mを測る。玄室高は、奥壁部約2.6m、中央部約2.8m、羨道高は、玄門部約1.7m、羨門部約1.6mを測り、玄室高と羨道高の段差は、天井石崩落のため確認できないが、推定0.8～0.9mであろう。

玄室部天井石は2枚確認できるが約1m×1mほどの石を使用している。

側壁は両側とも1段目に1.5m×0.6～0.7mの石を横積みし、2段目の石を小口積みにしている。2段目からの石は1段目の石と比して総じて大きくない。奥壁は1.5m×0.7～0.8mの石を設置し、その上に側壁と同様に石を横積みしている。持ち送りは両側壁で4段目より確認できる。

床面は、基底部の石の露出状態からみて、旧状に近いと推定できる。ただ、入口附近に向って傾斜しているので、この部分の床面レベルは高くなろう。

石材はすべて花崗岩である。

以上のように、当墳は墳丘の地形変化の他、石室内部は、ほぼ旧状を保っている。

### 〈小結〉

雲雀丘古墳群C北群3号墳は、標高約137mに位置し、両袖式の横穴式石室を有する径約15m～16m、高さ3.5mの円墳である。築造年代は、石室規模、石室の築造法からみて、6世紀後半頃と比定できよう。(高田)

### (3) 雲雀丘古墳群C北群4号墳(図版1・3・6・7・8)

#### 〈墳丘〉

当墳はC北群3号墳と西側で接して築造されている。墳丘の南側および北側の裾部は、山路のために少し削平されているものと思われる。墳頂の封土は少し流出して天井石の東半分が露見する。しかし、全体的にはほぼ旧状を保つものと考えられる。

墳頂は現在、標高144.75mであり、基底部は北で約143m、南で約141mを測る。したがって、この墳丘は、径約15m、高さ約3mの円墳であると思われる。

墳丘の南側の裾から石室の入口に続く落ちこみは、主軸の位置より少しつれるところから、羨道部の痕跡ではなく人為的に掘られた通路であると考えられる。

また、墳丘は巧みに旧地形を利用しているため、南東方向より墳丘を望むと実際の規模より大きく見えるが、この視覚的効果は、墳丘築造当時に意識されたものであろう。

#### 〈石室〉

当墳の石室は、主軸をN-23°-Eにとり、南々西に開口する右片袖式の横穴式石室である。

石室の規模は、現存長3.81m、玄室長3.31m、玄室幅は奥壁部で2.45m、袖部で2.25mを測り、玄室幅指数は74で、玄室の平面形は方形に近いプランを持つ。羨道部では、玄門幅が1.05mであり、残存する羨道部はほとんど確認されていない。ちなみに羨道幅指数は49である。玄室の高さは、現状床面から1.8mを測り、床面には排水溝が確認されている。この排水溝は、奥壁側で20cm、側壁沿いでは15cmであるが、これは袖部附近では確認されていない。現状の玄室床面は、排水溝の状況からすれば石室が築造された当時のレベルに近いものと思われる。また、羨道部のレベルが高くなるのは、流入土の堆積であろう。

石室に用いられた石材は花崗岩で、風化の著しい石材も散見される。石室の構築は玄室部で4段積みを基本とし、その上に天井石を玄室部で5枚、羨道部では1枚を架構する。側壁では1段目から2段目に比較的小さな石材を横積みしているのに対し、3段目から4段目にはやや大きな石材が用いられている。奥壁においては比較的規格性のある角ばった石材が使用されているが、8段目は小規模な石材が不規則に横積みされ、間隙を拳大の石で詰めている。袖部においては比較的規模の大きい石材4枚を横積みし、その上に人頭大の角ばった栗石を入れ、天井石を架構する。

現状では、側壁の石材が西から東に向って崩れかけて歪んでいるが、これは石の積み方が横積みを主として行なっていること、古墳が小さな鞍部上に築造されて南に急傾斜することによるのであろう。したがって、石室築造当時は、東西両側壁側にかなりの持ち送りがあったものと思われる。

なお、墳丘の南東側に1.3m×0.6m程度の花崗岩が確認されるが、おそらくこの石材は、当古墳の羨道部の天井石に用いられていたものであろう。

#### 〈小結〉

当古墳は、西摂地方では珍しく方形に近いプランをもつ古墳であり、標高約141mに築かれた高さ約3m、径約15mの円墳である。

石室築造当時の全長は不明な点が多いが、奥壁から墳丘の裾までは約11mを測る。しかし、石室の形態から考えると、これをそのまま石室長とは考えられなく、もっと短くなるだろう。

築造年代は、石室形態などから、6世紀前半から中葉頃に比定されよう。（中野）

#### （4） 雲雀丘古墳群C北群6号墳（図版1・8）

##### 〈墳丘〉

6号墳は西から東へ延びる尾根の南傾斜面に築造されている。墳丘は現在南東部において削平を受け平担面となっており、廐屋と石積みに埋まれた泉水が残されている。この削平にともなって石室羨道部が破壊され露出しており、玄室の天井部も一部露出している。また墳丘南部においては2段の崖があり、2つの平担面を形成している。これも人家造成のための削平によるものと考えられる。

このように墳丘は基底部南東部で削平・削除などによって大きな改変がみられ、旧状を保っているとは言いがたい。

墳丘の規模は、旧状をよく保っていると思われる北東部に墳丘の基底部らしい谷の残っていること、それが旧状にほぼ近いと考えられることから、径10m高さ3mの円墳であったと推定できる。現在の墳頂は152mであるがこれは旧状に近いものであろう。

##### 〈石室〉

石室内には現在土砂が流入しているが、袖をもつ横穴式石室で玄室規模は幅約1.5m長さは3m～4mである。

##### 〈小結〉

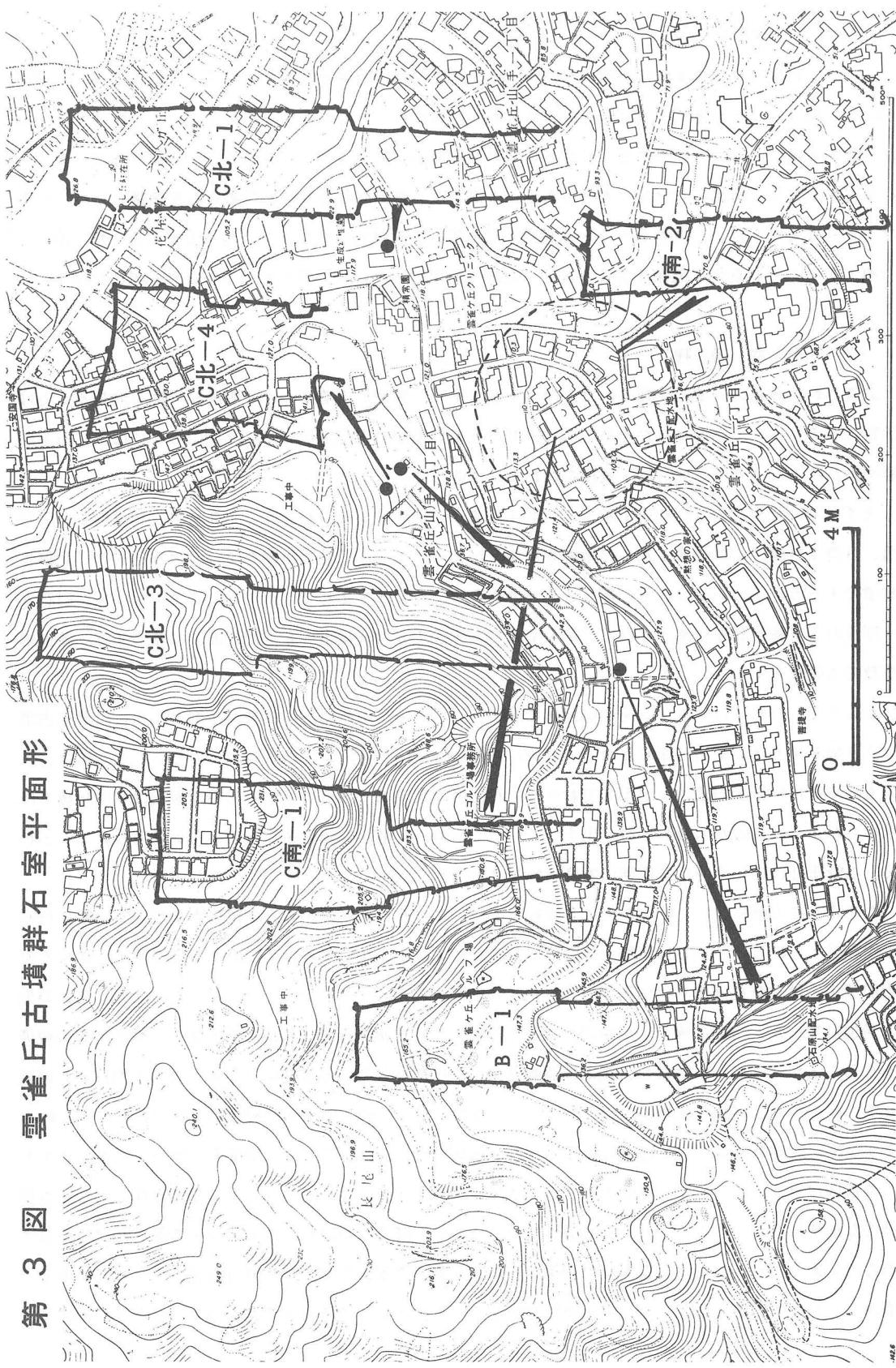
6号墳は東西に延びる尾根の標高約150m附近に位置し、横穴式石室を有する径10m高さ3mの円墳であったと推定できる。

築造された時期は石室の形態・大きさ、墳丘の規模から考えて6世紀の後半に推定できる。（岡島）

### III まとめと今後の課題

以上雲雀丘古墳群C北群の3・4・6号墳の3基について調査したところを記してきた。すでに「I. 雲雀丘古墳群の概要」で述べたように雲雀丘古墳群ではほかにB群1号墳、<sup>①</sup>C南群1・2・3号墳、C北群1号墳の計5基が調査されている。A群はかって5基が確認されたのみで現在は全く不明である。ここでは従来の調査と今回の調査結果から、長尾山の古墳群のなかで雲雀丘古墳群がいかなる位置を占めるのか若干の考察を試みたい。

第3図 雲雀丘古墳群石室平面形



## (1) 分布状況

A・B・C南・C北の4群は東西約800m、南北約500mの範囲にわたり分布する。標高では100~200mの間に相当し、それぞれ摂西平野を眺望する斜面に築かれているが、同一尾根上でなく丘陵の大小複雑に分岐する尾根に分れて分布する。C南とC北の2群は前述したように石野氏が一つの群としていたものを『宝塚市史』で南北に二分したものである。本書では名称の混乱を避けるためこれを踏襲したが、分布状況からするならば、C北群2~4・6号墳とC南群の古墳は同一尾根上に立地すると考えられ、南北で分離してそれを別に把握するよりは、C北群1号墳のみを分けて考えたほうがより妥当ではなかろうか。

## (2) 形成過程

調査された8基の古墳で発掘されたものが4基であり、個々の古墳について明確な時期を論じることは困難である。まして発掘された4基でもC南群の3基は遺物の実測図がない。そこでここでは主に石室形態や築造法をたよりに形成時期・過程をおおまかに辿るにとどめる。

まず石室の平面形では片袖式1基(C北群4号墳)、両袖式5基(C北群1・3号墳、C南群1・2号墳、B群1号墳)、無袖式1基(C南群3号墳)がある。このうち最も問題を含むのは片袖式のC北群4号墳であろう。この石室は玄室の幅2.25~2.45m、長さ3.81mで方形に近いプランを示す。白石太一郎氏の玄室幅指数を根拠とすれば、第Ⅰ型式(実年代で5世紀後半~6世紀初頭)に該当する<sup>②</sup>。羨道幅指数でも同様である。

ところで、方形に近いプランを周辺地域に求めると、芦屋市山芦屋古墳が唯一の例となる。山芦屋古墳は玄室幅3.15m、玄室長3.60mで、ほぼ正方形に近く巨石を用いて構築されている。この場合、古いもので6世紀後半の遺物が出土しており、巨石使用の大型墳であることからも築造年代は6世紀後半に求められよう。周辺から竈形土器が出土していることや、文献から帰化系氏族の存在が考えられることから、水野正好氏のいう帰化系氏族の墳墓<sup>⑤</sup>と想定されよう。

このように方形に近いプランからは5世紀後半ないしは6世紀初頭から6世紀後半までの広い幅で石室年代を捉えられる。しかしC北群4号墳は玄室高がわずか1.8mにすぎなく、第Ⅰ型式の標準とされる大阪府芝山古墳や奈良県椿井宮山古墳のように天井が高く、かつドーム形になっていない。また、この時期の羨道は短いが、当墳の場合、土砂の流入により現状で0.5mを確認したにとどまり、築造当初の規模を知ることができない。ただし、羨道部西側壁は土砂に埋没している基底部はともかく、玄門石から連続せず、長くても玄室長を凌駕しないのではなかろうか。いずれにしろ、6世紀後半以降の石室にみられるような長い羨道を有しないと考えられる。一方、石室の石材は巨石でなく、奥壁も一枚石を使用しようとした意図は全く認められなく側壁と同一の技法で構築している。さらには帰化系の墳墓と想定せしめる積極的な根拠に乏しい。こうした点を考慮するならば、C北群4号墳は6世紀前半から中葉にかけて築造されたといえるだろう。なお『宝塚市史』第四巻の図57、雲雀丘古墳群C南群分布図に示されている6号墳は、C北群4号墳に類似した石室平面形を呈する。発掘によって確認されたものなのかどうか不明であ

るが、両者が近接していることよりあるいは同様の石室形態である可能性が考えられる。いずれにしろC北群4号墳は雲雀丘古墳群、ひいては長尾山の古墳群でも最も先行して築造されたといえよう。

これに続く段階としてC南群1号墳があげられる。当墳は両袖式であるが、玄室の長さが幅の約2倍で、狭長なプランと比較して古い要素をもつ。6世紀中葉から後半頃と推定される。

狭長な両袖式石室にはC北群1・3号墳、C南群2号墳、B群1号墳が含まれる。B群1号墳は出土遺物から6世紀後半に比定され、ほかの3基についても並行する時期が考えられる。ただ、C南群2号墳は袖が強くは意識されていなく若干時期的に下るかもしれない。

最も新しい段階に該当するのは無袖の小型横穴式石室をもつC南群3号墳である。この型式は長尾山の古墳群で普遍的にみられる7世紀前半の石室形態である。これらの多くは同一時期のものばかり群集する傾向があるが、他時期の古墳と混在する群としては、ほかに雲雀山西尾根古墳群B群(1号墳)、中筋山手西古墳群(5号墳)の例を指摘できる。

以上述べてきた形成の諸段階を整理すると、

- ① 6 C前～中 C北群4号墳、(C南群6号墳)
- ② 6 C中～後 C南群1号墳
- ③ 6 C後～末 C北群1・3号墳、C南群2号墳、B群1号墳
- ④ 7 C前 C南群3号墳

となる。

A群については資料を全く欠くため論及できないが、石野氏の分布図に「小石室」と記されていないことからすれば、少くとも6世紀後半代には造墓されていたと思われる。

### (3) 立地条件

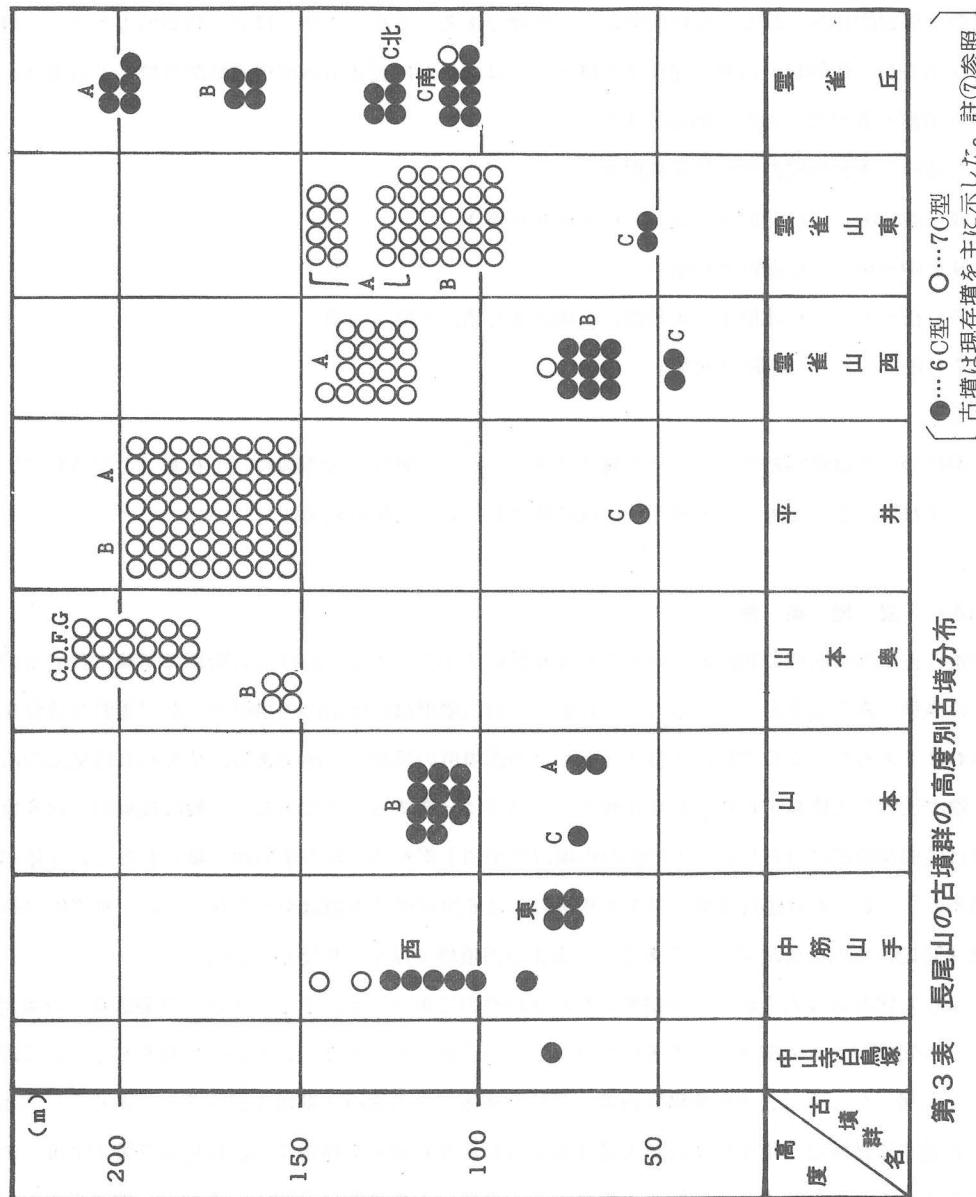
雲雀丘古墳群の形成の初段階と考えられる6世紀前半から中葉にかけての時期は同時に長尾山の古墳群全体の濫觴とみて差支えないだろう。したがって当古墳群は長尾山の古墳群のなかで重要な地位を占めてくるわけであるが、ここで特に注目すべき点は当古墳群の特異な立地である。すなわち長尾山の古墳群の諸古墳と比較して標高100～200mという高所に分布することである。一般に長尾山では6世紀代の古墳は尾根突端部に分布し、7世紀代の古墳は尾根頂上部からその南斜面に築かれるという傾向を示す(第3表)。とりわけ他古墳群では120m以上に6世紀型の古墳は全く存在しない。垂直的な高低がそのまま時期の新旧を反映するのであるが、雲雀山古墳群では全く相反している。

こうした状況はなんらかの社会情勢に左右されたのであろうが、ひとつには古墳築造時の石室用材の確保という問題が大きく関連してくるのではないだろうか。ひとたび、人々が石で墓を造るという現実的行為にたち帰ったならば、当然容易に古墳の石材を調達できる場所に墓域を設定するであろう。雲雀丘古墳群の立地する地域は古墳用材には最も適すると思われる花崗岩を産出する、長尾山丘陵でも唯一の地域なのである<sup>⑥</sup>。これは石切山花崗閃緑岩と称されるもので、その範囲は石切山、満願寺、雲雀丘の地域に限定

され、雲雀山東尾根古墳群の立地する尾根の東側の谷以西には全くみえない(第4図)。このような事情から、雲雀丘に早い時期から盛んに古墳が造営されたといえよう。長尾山で6世紀代に造墓を開始するのは中筋山手西・東、山本A・B・C、平井C、雲雀山西尾根B・C、雲雀山東尾根Cの各群であるが、雲雀丘古墳群の占める比重が大きいのは、この石材確保という観点から看取できるのではなかろうか。

#### (4) 長尾山の古墳群と雲雀丘古墳群の性格

最後に、前述した形成過程、立地条件等の問題を含めて、長尾山の古墳群という大きな視野から、雲雀



丘古墳群の性格を考えたい。

長尾山の古墳群全体に関しては、分布調査によるもので発掘にまで及ぶ調査は一部に限られ、細かいデータを欠いている。したがってここでは分布状況・立地条件・群構成、石室形態によるおおまかな時期などから素描せざるを得ない。

さて、長尾山丘陵において現在確認できる古墳は約180基を数える<sup>⑦</sup>。これらは東西約3、5kmに涉る地域に、しかも標高50m前後の丘陵裾部から標高200mを越える尾根頂上部にまで広く分布する（第4図、第3表）。分布状況からすれば、分布範囲の広さに対して、古墳の数が少く、高安千塚や平尾山千塚といった大型群集墳と比較して分布密度が希薄である。このことは長尾山の古墳群が求心的なひとつのまとまりとして捉えられないことの傍証でもある<sup>⑧</sup>。

ところで、長尾山丘陵の地形に着目するならば、丘陵を南流する最明寺川、天神川によって三つに区分されよう。古墳群について言えば、最時寺川以東に雲雀丘・雲雀山西尾根・雲雀山東尾根・平井の4古墳群が、最明寺川と天神川に挟まれた地区に山本・山本奥古墳群が、天神川以西に中筋山手古墳群と独立墳である中山寺白鳥塚古墳が存在する。さらに、最明寺川以東は、前述した立地条件により雲雀丘古墳群が別個に捉えられることから、長尾山の古墳群は4つの地区に分類して把握しうる。ここではこれら4地区を東から、雲雀丘地区、雲雀山・平井地区、山本地区、中筋山手地区と呼び以下すすめる。

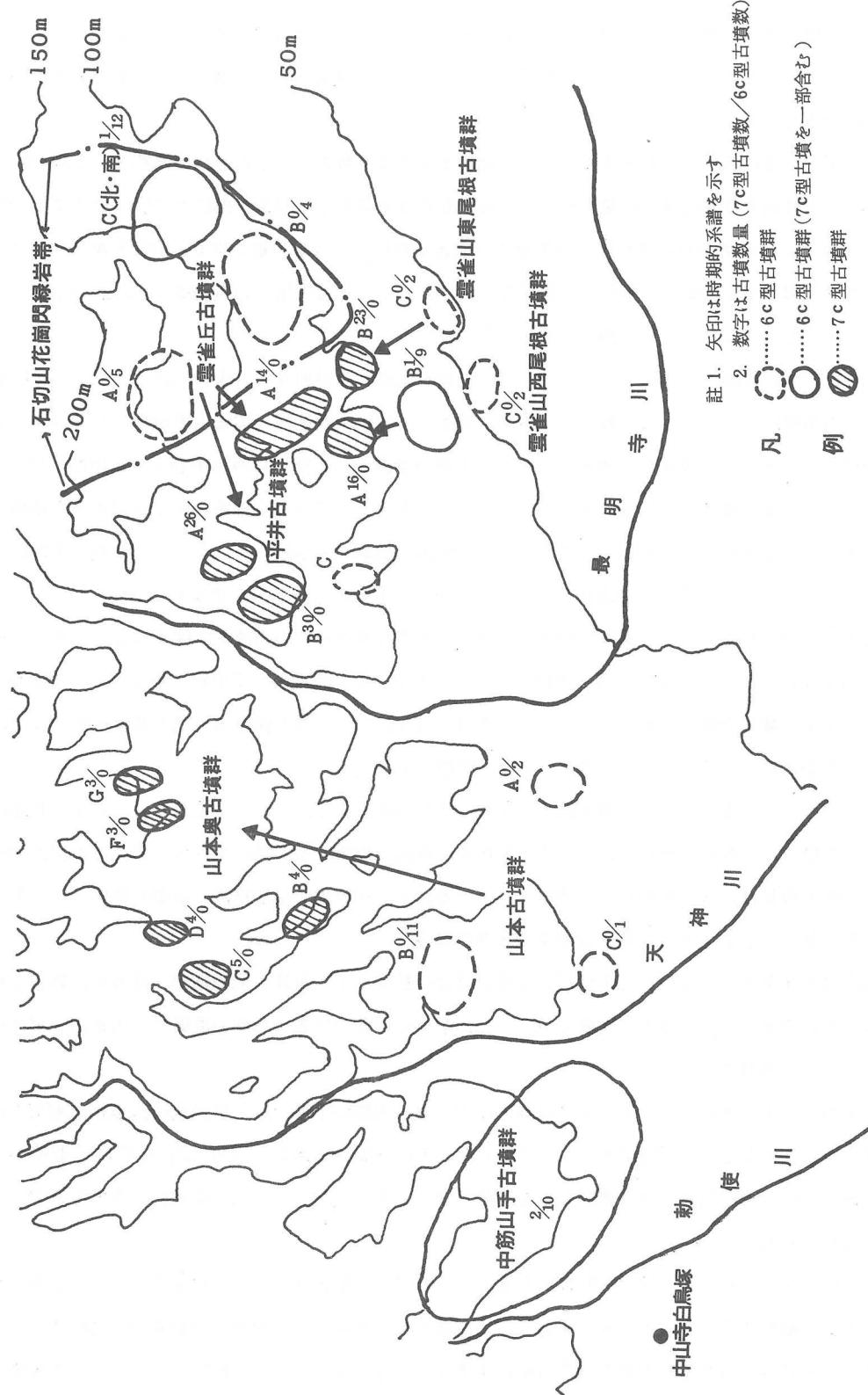
群構成を地区別にみると、まず雲雀丘地区の22基の古墳は6世紀代の古墳が主体をなし、一部7世紀前半期の古墳が含まれる。時期的には6世紀前半ないし中葉の早い時期から7世紀前半までの長い期間にわたる。長尾山丘陵の東麓に位置し、長尾山の古墳群に含まれない川西市勝福寺古墳（6世紀前半）との関連は、形成期において考慮しておかねばならない問題である。

雲雀山・平井地区は123基の古墳を数え、全体の7割弱を占める。しかし、これらのうち110基は7世紀型の古墳で、これが主流をなして、8～30基の規模で群集する。特に平井A・B、雲雀山西尾根A、雲雀山東尾根Bは大きな規模をもち構成されている。6世紀中葉に尾根裾部に造墓が開始され、7世紀に入り群を異にし、いっせいに終末期群集墳を展開する<sup>⑨</sup>。

山本地区は43基あり、6世紀と7世紀の古墳がほぼ同数である。前者が尾根裾部、後者が丘陵頂上部に立地する点は雲雀山・平井地区と同様である。ただ7世紀のものは3～5基の群集で、雲雀山・平井地区に比してかなり規模が小さい。

中筋山手地区は12基が含まれる。4つの地区の中で最も規模が小さい。7世紀代の古墳が尾根頂上部に立地するのは前の2地区と同様であるが、群集しない点は対照的である。中筋山手古墳群と勅使川を挟んで位置する中山寺白鳥塚古墳は家形石棺を内蔵した巨石墳で、独立している。位置的にみて中筋山手地区に含めて捉えられる。

以上の群構成からそれぞれの地区的時期的系譜をたどれば、雲雀丘地区は6世紀前半ないしは中葉から7世紀前半まで継続するが、大半は6世紀のうちに造墓活動が終息し、7世紀にはわずかな造墓にとどまる。雲雀山・平井地区は6世紀中葉から7世紀前半までである。ここでは7世紀にはいってから大規模な



第4図 長尾山の古墳群の分布状況と群構成 (古墳數量は現存墳を主に基準とした。註⑦参照)

群集墳が形成され、前時期の古墳数をはるかに凌いでいる。こうした現象でもって当地区の性格は特徴づけられる。山本地区は6世紀後半に形成され7世紀前半まで続くが、ほぼ均等な規模で造墓がなされる。中筋山手地区も同じく6世紀後半から7世紀前半まで継続する。しかし当地区的系譜は6世紀末頃から7世紀初頭に独立盟主墳が築造されること、7世紀前半期に古墳が群集形態をとらないことが注目される。

このように地形による区分で長尾山の古墳群を把握するとき、各地区ごとは量的・質的に状況を異にし独自の系譜をもつことが知られる。さらに山本、中筋山手地区は古墳の数量からみて、その地区内で完結しているのに対し、雲雀丘地区と雲雀山・平井地区はこの点均一な時期的系譜をたどることができない。古墳の数量という単純な条件からみれば雲雀丘地区、雲雀山・平井地区はひとつの流れのなかに捉えられる。とすれば、各地区は最明寺川で画される東側と西側で大きく状況が異なるといえるであろう。したがって、雲雀丘古墳群は立地条件の有利さから、早い時期に形成され、7世紀にはいり、雲雀山などの古墳群に造墓主体が移動した可能性も考えられてこよう。付言するならば、長尾山丘陵における古墳群の東部と西部は、巨視的には猪名川流域と武庫川流域の二つの地域の人々の墓域と考えられるのではあるまいか。雲雀丘古墳群の造墓者を猪名川流域に求めた場合、その大部分は若王寺遺跡、下坂部遺跡などの周辺にあたるであろうが、すでに指摘されているように雲雀丘眼下に展開する加茂遺跡では古墳時代後期の須恵器が出土しており<sup>⑩</sup>、これとの関連も考慮しなければならないであろう。（坂井）

#### 〈註〉

- ① 昭和53年7月宝塚市教育委員会により発掘調査が実施された。近く報告書刊行が予定されている。されている。
- ② 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」（古代学研究、42・43合併号）
- ③ 昭和51年3月、芦屋市教育委員会により発掘調査が実施された。
- ④ 『新修芦屋市史』資料編Ⅰ（昭和51年）
- ⑤ 水野正好「帰化人の墳墓」（『月刊文化財』69年10月）
- ⑥ 『宝塚市史』第四巻 付図「宝塚市とその周辺の地質図」参照。なお、雲雀丘古墳群B群1号墳の発掘調査の際、地山中に大小の花崗岩塊が多くみられた。ここではこれらの岩塊が古墳の用材に使用されたことが知られた。
- ⑦ ここで算出した古墳の数量は現存墳を主に基準としたので、過去の資料にみえる消滅墳はほとんど除外した。尾根裾部に立地する古墳群はかなり数が少なくなっていることを考慮する必要がある。これについて『市史』（第4巻）を参照されたい。
- ⑧ 「長尾山の古墳群Ⅰ」（関西学院考古、第4号）の「I、序説」
- ⑨ 岡田務ほか『宝塚市雲雀山古墳群』
- ⑩ 『摂津加茂』（関西大学文学部考古学研究 第3冊 昭和42年）

第4表 雲雀丘古墳群の古墳比較一覧表

C群

古墳名	墳形	立地・標高	墳径	墳丘高	内部主体	石室形態	石室主軸	開口方向	石室長	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅	羨道高	備考
1号墳	円墳	尾根上 100m前後	約10	約2.5	横穴式 石室	両袖式	N 80°E	西南西	約7.3	3.85	1	1.6	3.5	1	出土遺物 須恵器・鐵 身・鉢・装	出土遺物 須恵器・鐵 身・鉢・装
2号墳	円墳	尾根上 100m前後	6強	2強	横穴式 石室	両袖式	N 80°E	西南西	4.4	3.2	奥壁 1.1	1.6	1.9	0.9	遺物不詳	遺物不詳
3号墳	円墳	尾根上 100m前後			小型横穴 式石室	無袖式		西	現存 3		0.7	1.1			遺物不詳	遺物不詳

C北群

1号墳	円墳	尾根上 116m	1.4	3.5	横穴式 石室	両袖式	N 12°E	南	現存 8.5	4.7	奥壁 1.48 袖部 1.7	2.2	3.8	玄門 1.15 羨門 1.3	宝塚市指定 史跡
3号墳	円墳	尾根傾斜面 137m	1.5 1.6	3.5	横穴式 石室	両袖式	正南北	南	現存 約9	3.8	奥壁 1.48 袖部 1.7	2.6 2.8	現存 約5.2	玄門 1.2 羨門 1	石室内祭壇 設置 石室内 セメント舗装
4号墳	円墳	尾根傾斜面 141m	1.5	3	横穴式 石室	右片袖式	N 23°E	南南西	現存 3.81	3.31	奥壁 2.45 袖部 2.25	1.8		玄門 1.05	排水溝 石室や 変形
6号墳	円墳	尾根傾斜面 150m	1.0	3	横穴式 石室	有袖式		南南東	3~4	1.5					土砂流入

B群

1号墳	円墳	尾根上 135m	1.3 1.5	3.5	横穴式 石室	両袖式	N 12°E	南南西	8.8	3.2	奥壁 1.2 袖部 1.3	2.5	5.6	1	美道部の修復 後世の遺物 須恵器・鐵 身・鉢・装
-----	----	-------------	------------	-----	-----------	-----	--------	-----	-----	-----	------------------------	-----	-----	---	-----------------------------------